



文化情報学部所蔵 マサオ・ミヨシ文庫について(1) : ポスト・コロニアリズムと環境の視点から人文学 を再編する試みについて

著者	田口 哲也, 村木 貴俊
雑誌名	文化情報学
巻	6
号	1
ページ	31-37
発行年	2011-03-10
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013113

資料紹介

文化情報学部所蔵 マサオ・ミヨシ文庫について(1)

一ポスト・コロニアリズムと環境の視点から人文学を再編する試みについて一

田口 哲也・村木 貴俊

本稿では、故マサオ・ミヨシ博士の蔵書が同志社大学文化情報学部の文献室に入るにあたり、ミヨシが成し遂げた業績の紹介と、その学問的探求の意味を改めて考え、また今回どのような経緯でミヨシの蔵書が本学部に入るようになったかを併せて報告している。付録としてミヨシの略歴、主な業績一覧、蔵書に関連した写真、蔵書の整理から基礎的なデータの入力まで協力いただいた学生を代表して村木貴俊からの報告を付した。なお、文献室に設置された文庫の全容を、次号以降、リストも含め詳しく紹介してゆく予定である。

1. はじめに

このたび故マサオ・ミヨシ博士の蔵書（以下ミヨシ文庫と呼ぶ）が同志社大学文化情報学部の文献室に入るようになった。この文庫はミヨシ博士とご家族のご厚意によりその一部を破格の値段で学部図書費の共通費から購入し、関連資料と残りの書籍をご寄付いただいた。文庫の購入と受け入れに関してご尽力いただいた川崎廣吉学部長、矢野環研究主任をはじめとする学部執行部と、提案をサポートしていただいた学部教授会に深く感謝する。

ミヨシ文庫についての解説とこの文庫をどのように活用するかが本稿の主な目的であるが、今回はその前段階として、ミヨシ文庫が京田辺に迎えられることになった経緯と、ミヨシとは何者か、また彼が21世紀に人文学をどのように再編しようとしていたのかを略述することにする。

なお、文庫として学部のみならず全世界に対して利用可能な書籍は2000冊を越え、その他寄贈頂いた関連資料を1点1点数え上げると総数は軽く1万点を越える。詳しい解説は次回に回すが、その中にはノーベル文学賞受賞に関してミヨシが強力なバックアップを行った大江健三郎氏からの直筆の献詞と署名が入った初版本や、ヴィクトリア朝期にロンドンで出版された美しい挿絵入りの文学書や、ミヨシのタイプ打ちの博士論文など、貴重な資料が100点近くある。

2. マサオ・ミヨシについて

ミヨシの公的な履歴と業績については略歴と著作目録を末尾に付したので、そちらを参照していただきたい。ミヨシは現代の日米の思想界では誰しも知るどころであるが、ここで、彼の学問上の探究は何であったのかを改めて考えてみたい。ミヨシは、旧来は学問として流通していた、国民国家を基礎とする各国の孤立した人文学の閉鎖性がすでに20世紀の最後10年あたりから顕著になってきた点を徹底的に批判し、人文学を何らかの新しい方法論のもとで再編できないかという一連の問いかけを行った。

ミヨシは2009年にその波乱万丈な生涯の幕を下ろしたが、2010年にスタンリー・フィッシュとフレドリック・ジェイムソンが編集する <Post-Contemporary Interventions> のシリーズの一冊として、死後出版の論文集、*Trespasses* がデューク大学出版局から上梓された。この本の前書きをジェイムソン自身が書いているが、早くも1980年代中葉に後期資本主義の現れとしてのポスト・モダニズムを論じた論客はミヨシの探究を歴史的な文脈の中に置き、次のように説明する。

新しい歴史的な状況は、新しい用語とは言わないまでも、少なくとも古い用語の再検討＝再概念化を必要とするが、これはマサオ・ミヨシの仕事とその受容のされかたの中に最も明確に現れている。2つの古いパラダイムが私たちと

向き合っていて（そしてこの2つのパラダイム同士が向き合っているのだが）、それはすなわち、知識人とその専門化という問題と、国家とエグザイルの問題である(Miyoshi 2010: xi)。

略歴から分かるように、ミヨシはアメリカに帰化した英文学の教授であった。日本やアメリカで英文学を研究するというのはどういう意味があるのだろうか。ミヨシは2007年に日本語に翻訳されたインタビュー集の中で次のように語っている。

僕が東京の本屋に行く時に気づくのは、英文学の研究本はありますが、あれは誰が読むのか見当がつかないのです。アメリカでも、前に話したように読者は激減していますが、日本でもテニユアのためにああいう本を書くのでしょうか。もしこうした学者たちが、国外の英文学の教授と対話したいと考えると、それが誰に何の役に立つのでしょうか。

僕は、どのように読者に挑んでいるのかを知りたいのです。だからこそ僕は『日本の英学100年』を読むことで、英文学を学ぶことがこの重大な百年間に日本人にとって何を意味したかを知りたかったのです。結局のところ、日本は最初はほとんど英国の文化的な植民地だった、それからアメリカによる占領政策、そして日本が十分豊かになった。それぞれの時代に、英文学が日本人にとって何を意味したかについて、知りたかったのですが、そうした記述をどこにも見出せませんでした。だが、もちろん英文学者は影響などについては語れるのです。T・S・エリオットの誰々への影響、イェーツの大江への影響など——。僕にはほとんど無価値の問題だと思います（ミヨシ・吉本：342）。

ミヨシはかつて日本の英語教育を取り上げ、大学入試の英語、会話学校の英語、大学の教養課程の英語、この3つが互いを完全に無視していて、それぞれがまったくばらばらに英語教育を行っている現状を舌鋒鋭く批判した。確かに言われてみるとその通りなのだが、この3つがばらばらに英語教育を行っているとしても誰一人異を唱えようとしなかったのは、高度に発達した日本の消費社会がこの3つの存在を市場的に許容したからである。

ミヨシのこのような容赦のない、クリティカルな視点は単に日本だけに向けられているのではな

い。アメリカの大学がどのように企業化してきているかについての緻密な研究も行っている。つまりジェイムソンが言うように、ミヨシは「国境」という国民国家による物理的・心理的制御装置から自由な議論を行い、また知識や知識人という自己規定からも自由な議論を試みようとしていると言える。後者に関してもミヨシは徹頭徹尾懐疑的である。

知識はしばしばまったく逆の働きをするものです。知識人は僕が持ち込もうとしているような類の混乱を抑えるよう教育され、また、教育しています。これまでの議論で僕は「文化」という言葉も使いました。だが、この「文化」という言葉は、知識人として、この特権階級の一員として自分を保護し「知識」を発達させます。探究するのではなく、「知識」とこの「文化」を護るということの意味をしています。そして一度この「文化」というものを受け入れると、そのとたんにそれはいかにわしくなるのです。だから人は文明化されていない、非知識の人々を排除しようとする。（ミヨシ・吉本：343）

一言で言うと、「知識」や「学問」は、消費社会に組み入れられ、制度化すると、本来の探究という知的エンジンが停止して機能不全に陥る。誤解を恐れずに言うならミヨシは「知識」や「学問」に本来の探究という機能を回復させるために、知のエスタブリッシュメントに対して挑発を続けていたと言える。そしてこの壮絶な格闘の背景として忘れてはならないのが、ジェイムソンが指摘するもう一つの相克の対象である国民国家とエグザイルの問題である。第2次世界大戦時に多くの日本人がなめた苦い経験をミヨシはパークレーでのベトナム反戦運動で活かす。厳密な論証を繰り返したミヨシの全貌を数語で語るのは無理があるが、ミヨシには第2次世界大戦のあまりにも悲惨で不幸な結末は、自らが置かれている歴史的な状況を徹底的に問うことを忘れた、あるいは許されなかった結果が招いたものである。

3. 蔵書移管の経緯

ミヨシの業績については*Trespasses*の末尾に選択的ではあるが主要な著作と論文のリストがあがっている。また、吉本光宏との対談集である『抵抗

の場へ』の末尾にも2007年の時点ではあるが、日本語で読めるミヨシの著作・論文のリストがある。今後はより包括的な書誌が出ることであろうが、ミヨシ文庫にはそのような書誌の作成に不可欠な資料が多数含まれている。

だが何よりもミヨシ文庫の最大の特徴は、これらのミヨシの業績の元となった膨大な書籍、雑誌論文、新聞その他の定期行物からの切り抜きが、ほぼすべて収録されていることである。ラーネット図書館での保存が決定している「マサオ・ミヨシ収集批評書集成」と合わせると、実質上私がミヨシを訪れた2009年8月現在のミヨシ蔵書のほぼすべてが京田辺キャンパスに移設されることになる。

ミヨシは自らの思想を紡ぎ出す過程で徹底的に書物と格闘を繰り返した。それは論文や著作として結実した彼の批評の中からもうかがい知ることができるが、ミヨシ文庫の中にはこの思想の対決の様子が手にとって分かるようなボールペンなどによる激しい書き込み、マージナリアの類に溢れた書物群がある。これらの書物に関してはプライベートの問題もあり、当面は閲覧を研究用に限定することになるだろう。また、書物への書き込みだけではなく、挟み込みの資料なども相当数に上る。今回は文化情報学部の学生諸氏の協力により大まかな整理は終えたが、正式に活用できるようになるためにはもう少し時間が必要である。この点に関してはさらに鋭意作業を進め、次回には文庫の全貌が見えるような紹介の続きをする予定である。

閑話休題。2008年に、ミヨシのかつてのハーバードでの教え子であるハーバード大学ライシャワー東アジア研究所のジョン・ソルト博士から、ミヨシが蔵書を手放すのではないかという情報が入った。ミヨシはすでにカリフォルニア大学サンディエゴ校から離れていたが、デルマール(Del Mar)という風光明媚なサンディエゴ近郊の郊外に住み、旺盛な批評活動を続けていた。冠教授として特別の研究待遇を受けていたミヨシは、建築や写真といった分野での高価な書籍を収集していたし、また、全米を代表するジャパノロジストの一人であるH.D. ハルトウニアンや、『オリエンタリズム』の著者であり、ポスト・コロニアリズムの旗手でもあったエドワード・サイード、上述のジェイムソン、あるいはノーム・チョムスキーといった一線の批評家や研究者との交流も深く、彼の書庫は

いわば「思想の武器庫」のようなものと想像された。そのミヨシが長く住みなれた西海岸を離れてニューヨークに移住する予定で、狭いニューヨークのマンションには蔵書が収容しきれないのでこの機会にすべて処分してしまうつもりだという話であった。

さっそく研究主任と相談し、まずは蔵書を調査すべく機会を待っていたところ、上述のソルト博士のご厚意でなかなか会見することのできないミヨシにアポイントメントを取ってもらうことができた。ロサンゼルスから車で南に向かい、無事にベルメールのミヨシ家に着いた。ところが運命とは皮肉なもので、この時点でミヨシは末期がんを宣告されていた。病床にあっても多忙なミヨシはなんと私たちとの会見の後にもインタビューがあるとのことであったが、それでも十分に時間を取ってくれた。できれば何回かに分けて調査をした上で蔵書の移管の話をするはずであったが、そのような余裕はもうなくなっていた。何しろアメリカのことだから、かなり早いペースで蔵書はサンディエゴ校か、あるいはその他近郊の大学に移管するという話が出てきても不思議ではなかった。この機会を逃すと同志社のミヨシ文庫は永遠に実現できなくなる。そう思っていたのだが、会見の最後のほうで恐る恐る蔵書の件を持ち出すと、ミヨシはなんと一つ返事でOKと言ってくれただけでなく、ミヨシの著書の中の一節を大江健三郎自身が翻訳した額入りの色紙をボーナスとして付けてくれた。(以下次号)

付録1:マサオ・ミヨシ(1928年—2009年10月1日)の略歴

(旧制)第一高等学校、東京大学文学部英文学科卒業。戦後、アメリカに渡りニューヨーク大学で英文学博士号取得。カリフォルニア大学パークレー校で英文教授を24年間、その後、同大学サンディエゴ校で英文学、比較文学、日本文学教授を17年間勤務。その間、シカゴ大学、ハーバード大学客員教授を兼任。

大江健三郎がノーベル文学賞を受賞した際には「ロサンゼルス・タイムズ」紙がインタビューに駆け付けたという挿話から分かるように、大江氏が西欧で深く理解される契機を作った功績はアメリカではよく知られている。

付録2:マサオ・ミヨシ氏の代表的な著作
単著

The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians, New York University Press, 1969.

Accomplices of Silence: the Modern Japanese Novel, University of California Press, 1974.

As We Saw Them: the First Japanese Embassy to the United States (1860), University of California Press, 1979. (邦訳 佳知晃子監訳『我ら見しままに——万延元年遣米使節の旅路』、平凡社、1984年)

Off Center: Power and Culture Relations between Japan and the United States, Harvard University Press, 1991. (邦訳 佐復秀樹訳『オフ・センター——日米摩擦の権力・文化構造』、平凡社、1996年)

Trespasses: Masao Miyoshi Selected Writings, ed. Eric Cazdyn, Duke University Press, 2010.

共著

吉本光宏編『抵抗の場へ——あらゆる境界を越えるために、マサオ・ミヨシ自らを語る』、洛北出版2007年

共編著

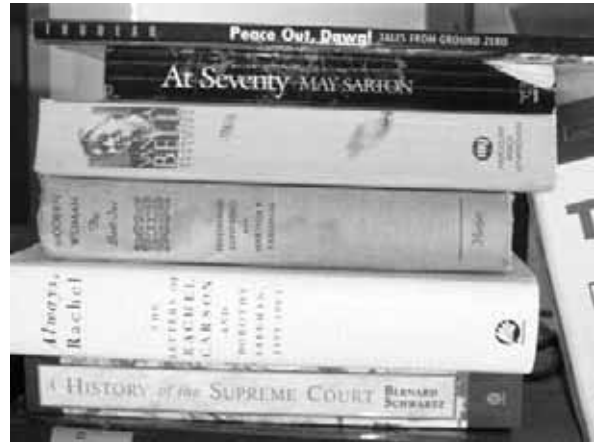
Postmodernism and Japan, co-edited with H. D. Harootunian, (Duke University Press, 1989).

Japan in the World, co-edited with H. D. Harootunian, (Duke University Press, 1991).

The Culture of Globalization, co-edited with Fredric Jameson, (Duke University Press, 1998).

Learning Places: the Afterlives of Area Studies, co-edited with H.D. Harootunian, (Duke University Press, 2002).

付録3: 関連写真



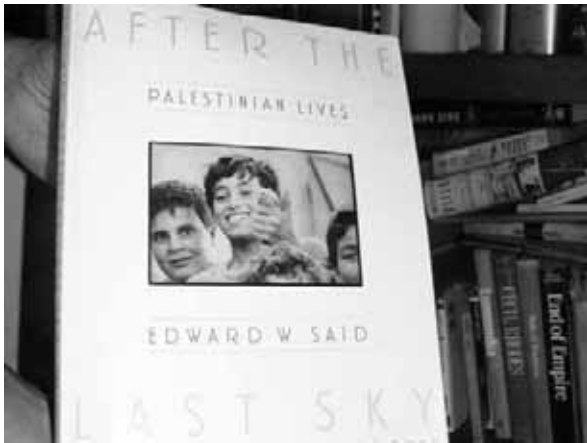
最高裁の歴史からグランド・ゼロまで、ミヨシの幅広い関心がうかがえる書籍群



ミヨシは環境に並々ならぬ関心を抱いていた



ミヨシは建築に関しても鋭い問いを発し続けた



エドワード・サイードからの本「戦う同志へ」という献詞が中に記されている



旧ミヨシ家の居間 窓から太平洋が見える



ベルメールの旧ミヨシ家の正面

付録4: 村木貴俊（博士課程前期1年）の報告

マサオ・ミヨシ文庫と 新学問領域についての報告

私たち比較文化研究室生一同は、6月中旬から8月上旬まで、故マサオ・ミヨシ氏が遺された2248冊の蔵書を整理致しました。ほとんどが英語で書かれた本だということもあり、作業は予想以上に困難を極めました。学部ゼミ長の鈴木天也君、副ゼミ長の日野直行君を筆頭に集中して作業を進めたおかげで、何とかまとまった形で整理することが出来ました。以下、今回の作業のまとめとミヨシ氏が自分自身の考えを語った『抵抗の場へマサオ・ミヨシ×吉本光宏』への村木の書評を付記致します。

1. 今回の作業のまとめ

総整理冊数：2248冊（以下詳細）

分類	冊数
A-哲学・批評	290
B-政治	184
C-経済・社会	183
D-文学	249
E-レファレンス	136
F-東アジア文庫	120
G-アートブック	80
H-写真	50
I-建築	135
J-文学批評	132
K-歴史	135
L-ポストコロニアリズム	170
M-美術批評	71
N-ジャパノロジー	80
O-アフリカ文学	46
P-大学研究	62
Q-カルチャー・スタディーズ	73
R-環境	52
総冊数	2248

参加メンバー：学部生13名・院生4名
代表者：鈴木天也（文化情報学部4年生）

作業手順

- ①ダンボール開封・書籍取り出し
 - ②田口教授による書籍の分類
 - ③分類ごとに情報（書籍名・著者名・出版年・出版社）をExcelファイルへ打ち込み、書誌番号の書かれた紙を書籍に挟む
- ※書籍のページ間に新聞や雑誌のスクラップなどが挟まっていることや、貴重なサイン本の存在も多々あったので、それらの情報も備考欄に入力し、その状態をカメラで撮影する
- ④書籍を番号順に棚へ配置する
 - ⑤各自が打ち込んだファイルを統合し、データベース化する

2. 吉本光宏編『抵抗の場へ——あらゆる境界を越えるために、マサオ・ミヨシ自らを語る』書評

2.1 ミヨシ氏の「抵抗」とは？

故マサオ・ミヨシ氏は付録1にあるような経歴をお持ちのため、一見すればアメリカ在住の昔ながらの文学研究者、というような印象を持たれるかもしれませんが、実際のみヨシ氏は、「既存の枠組みにひたすら挑み続ける」といった、非常に挑戦的で、一言で言い表すならば「抵抗」と評されることを亡くなられるまで続けておられました。例を挙げれば、学生時代（戦中）の英語習得、親のコネでの就職を一切蹴ってのイエール大学大学院への留学、自分の専門にこだわらない研究テーマの変遷及び担当学生への指導内容などが挙げられます。

2.2 超学問領域とは

上記で述べたように、みヨシ氏は既存の枠組みを常に疑い、新しい領域・知見を模索し続けられました。その中で特に注目すべきなのが、「学問領域（ディシプリン）」への抵抗です。

まずみヨシ氏はアメリカ合衆国メイン州にあるCollege of the Atlanticというエコロジーの学士、修士だけを出している大学に言及し、この大学が学生の主体性を重視しており、学生一人ひとりが自分自身のプロジェクトを見出さなければならない点を強調されています。この大学では、現在ある学問領域が混ざり合った、経済学、生物学、芸術などの専門を持つ博士が集められて教育をしているようです。

そしてみヨシ氏は、上記のような具体的な例を踏まえて、これからどう学問領域は変わっていくのかという点について述べています。学問領域を表す「ディシプリン」とは、本来「制裁を加える」「罰する」ということを意味しており、これをみヨシ氏は、

（前略）……つまりそれは領域内では批判をやめて忠誠を誓うことを意味します。もしその学問領域、規律から外れれば、その者は罰せられるでしょう。学問領域や、学部は、そうすることで包括的な学問の統一に反対する制度として維持してきました。僕にとって、超学問領域こそが知の始まりだと思いたいのです（みヨシ・吉本: 318）

と解釈しています。すなわち、既存の学問領域や学部といった枠組みを超えてこそ知が始まるということ。またみヨシ氏は、学問領域としての人文・社会科学は既に崩壊していると主張し、また今後学問領域を超えるにあたりそれにもいくつか種類があることについて、以下のように言及しています。

統合は普通、複数の学問領域にまたがること（interdisciplinarity）を意味します。複数の学問領域にまたがる（間学問）領域ということは、それぞれの学問領域は元のままであるということも意味します。したがって学生や教授は、プログラム、研究所、センターなどで一緒になることはあっても、結局はみんな自分たちの学科に帰ってゆきます。学科こそが昇進や解雇、テニユア、こうしたもの全てが決まる場所です。だから、間学問領域の実践や、プログラムは非常に一時的なもので、それは実際のところ二次的な過程のようなものなのです……（中略）……ですから、その意味で僕が言っている超学問領域（trans-disciplinarity）と、間学問領域（interdisciplinarity）は全く異なるものです。超学問領域とは、それぞれの学問領域が消え去り、別の考え方と融合することを意味します。したがって、経済学と文学はいっしょになるべきだし、経済学と生物学は一緒になるべきだ。僕が言っているのはこういうことなのであって、間学問領域が行っているのはそういうことではあり

ません (ミヨシ・吉本: 322)

2.3 まとめ—文化情報学部とミヨシ氏の接点

ミヨシ氏は人文・社会科学の学問領域について言及されていましたが、これを自然科学の領域まで拡大して研究に取り組むのが文化情報学部のあり方だと私は捉えています。現在私たちはまさに学問領域の「間」か「超える」という点で思索している段階にいるのかもしれません。もちろんこのミヨシ氏の主張は理想論であって、実際に超学問領域を確立するとなれば研究施設や成績評価などの問題が生じてくるのが予想されるため、簡単にはいかないでしょう。しかしこのミヨシ氏の考え方は、既存の学問領域をまたいで研究を進める本学部にとって重要となってくるディスコースと言えるのではないのでしょうか。

付録5: 文庫整理作業中の写真



作業初期の様子 未整理の本が並べられている



こちらも作業初期の様子 見えているダンボールは氷山の一角である



作業中期の様子 山積みになった本の書誌データを、全てExcelに打ち込んでいく



こちらも作業中期の様子 大人数で作業することにより研究室生間での友情が育まれた



作業完了後の様子 非常に細かく分類することが出来た